

写真や絵画はふつう「見る」といいます。一方で、「読む」という要素も持っています。「読む」を大辞泉（小学館）で調べると、いくつかある意味の中に、『文字や文章、図などを見て、その意味・内容を理解する』というのがあります。写真を見るという行為は、これにあたると言えます。

新聞に写真が入るようになったのはいつ頃のことでしょうか？ 銀板写真が発明されたのは1839年、日本に入ってきたのは1848年とされますが、日本で新聞に初めて写真が刷り込まれたのは1904（明治37）年正月で、報知が載せた女官や女優の顔写真だそうです。朝日ではこの年の9月30日に載った日露戦争の従軍写真が最初だったということです。

新聞の写真には、大きく分けて以下の3つの働きがあるといえます。

1. 出来事をありのまま伝える

これは写真のもっとも大切な役割です。よく知られる1994年のピューリツァー賞受賞作品「少女とハゲワシ」は、アフリカのスーダンで撮影された写真です。飢えで倒れたやせ細った少女とその背後に舞い降りたハゲワシをとらえた写真で、「百語るよりも1枚の写真が訴える力のほうが大きい」ということをまざまざと伝えています。

2. ニュースに登場する人や物を読者に紹介する

自分で見にいかななくても、野球やサッカーの試合の様子や、事件や事故の現場の模様を知ることができるのは、新聞に写真が載っているからです。人の顔は言葉でいくら説明しても、初めて会う人を見つけることは困難ですが、1枚の写真があれば間違えることはまずないでしょう。

3. 紙面のアクセントになり、記事を読みやすくする

文字ばかりの紙面では読む気は起きません。写真があることで紙面にメリハリがつき、親しみやすくなります。

(鈴木伸男 全国新聞教育研究協議会顧問)